東方予知夢伝

鏡餅

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「この町を出る。」そう茶髪の癖毛がある男の子に言うのは、東風谷早苗。

彼女は、幻想入りをしてしまうが、それを追う男の子の物語。

目次

洸と早苗
第一話　それぞれの思い　――　1
第二話　二人は　――　9
第3話　おわかれ　――　21

洸と早苗

第一話　それぞれの思い

「この町から、出て行く？」

そう、緑色の長い髪をした女の子に尋ねる男の子は、

夜行　洸≪やこう　こう≫。

彼は高校一年生になったばかりだ。

「うん・・・ごめんね洸ちゃん・・・」

そうしょんぼりとした顔で、茶色の髪をして癖毛のある男の子に謝る女の子は、東風谷　早苗≪こちや　さなえ≫

彼女もまた、高校一年生になったばかりだ。

「いや、そんなしょんぼりしなくてもいいけど・・・何かあったのか？」

洸はそう言いながら、早苗の顔を覗き込む。

「洸ちゃんには、もう会えないかもしれない・・・」

早苗は、そう言うと洸に見られないように顔をそっと下げる。
すると、洸は早苗の頬を優しく引っ張って言った。
「な～に、しんみりしてんだよ。いつものお前らしくないぞ。」

洸はそう言うが、彼の顔からは何処か悲しげな表情が読み取れた。

「洸ちゃんだって嫌なくせに･･･」
早苗は、少しむすっとすると、そっぽを向いた。
そんな早苗に洸は言う。
「あぁ、もちろんいなくなって欲しくはないよ。幼馴染だしな。
でも、俺は、早苗の意思を尊重したいからな。」

洸は笑顔でそう言うと、身支度を始めた。
早苗はそれを見てどうしたのだろう?と　思うが、そんな事を気にしないように洸は言った。

「さ～ってと、明日から出るんだよな?じゃあ最後の日ぐらい早苗の家に泊まらせても

らうか。」
「え!?ちょっと待って!な、何でそう言うことになるの?」
「最後だろ?何だ?見られたくないものでもあったか?」
「いや、別にないけど。」
早苗はそれだけ言うと、心配そうに聞く。
「本当に・・・ いいの?」
「あぁ。最後だからな・・・」

洸は分かっていたかのように、少しだけ寂しく言うと、一週間前の夢のことを思い出していた。

夢の中でも、早苗に別れを告げられたのだ。
会えない。と。

行くぞ。洸はそう言うと、早苗の手を引っ張り、玄関を開ける。
そんな洸に早苗は少しだけ、嬉しさを抱いていた。
洸の手は、暖かくなにより優しさを感じられる。

そんな手にもっと触れていたいと思う早苗。
そんな事をしてる間にも時間は過ぎていた。

〜〜〜〜〜

東風谷　宅

「って言っても親いないから入るの楽だよな。」

洸はそう言いながら、お邪魔しまーす。とだけ言った。
早苗と洸は昔、親を事故で亡くしてから二人で高校生まで支え合って来た。
周りからは、付き合ってるんじゃない？などの噂はあったが、洸にそんな気はなく、兄妹みたいな感じだった。
「洸ちゃん昼ごはん作ろっか？」

少しだけ、考え事をしている洸に早苗はそう尋ねる。
洸は顔を上げ、早苗に聞く。

「あれ？早苗って料理できたっけ？」

そんな少し馬鹿にしたような質問に早苗は、少しだけ慌てて言う。

「で、出来ますよ！洸ちゃんよりは上手にできます！」

そう慌てながら言う早苗を見て、少しだけ笑う洸。

この時間が、ずっと続けばいいのに・・・　そう思いながら二人は料理を作り始めた。

「あ、早苗。これ賞味期限切れてないか？」

「あっそうですね。でも一日前ですし、大丈夫でしょう。」

やっぱり、町を出て行くことは、大分前から考えていたんだな。

相談してくれてもいいのに・・・

洸はそう思いながら、「そうだな。」と言った。

その後も二人は調理をしていき・・・

「「完成!!」」
二人はそう言って軽くハイタッチをする。作ったのは、豚汁とお浸しと炊き込みご飯。
昔、運動会の徒競走でもハイタッチをしたな・・・　と、思い出す洸。
「それじゃ食べよっか」
早苗はそう言って洸に炊き込みご飯をよそう。
「はい。」
「ん。」

何処かの夫婦みたいだったが、そんな事はもう当たり前に近かったので、何も照れずにテレビをつける洸。
「「いただきまーす。」」

ご飯を食べている二人だが、どちらも口を開こうとはしなかった。
部屋に聞こえるのは、テレビ番組の漫才の声だけ。
すると、その沈黙を破るかのように、早苗は言う。

「洸ちゃん、あ～ん」

早苗は、お浸しを箸で掴むと、洸の口に向ける。

流石の洸も、これには少しだけ戸惑い、頬を赤くして言う。

「ばっ、馬鹿、いきなり何言うんだよ。」

「やっぱり洸ちゃんらしいね。でも、ほら　あ～ん。」

少し笑う早苗に、洸は諦めたかのように早苗の出して来た箸に口をつける。

「どう?」

「お、美味しいな・・・」

今まで、早苗をそんな風に見ていなかった洸は、少しだけ照れたように顔をそらして言う。

すると、洸もお浸しに箸をつけ、早苗の口にそれを見せる。

「ほら、あ、あ～ん。」

「あ～ん。」

早苗はそれを躊躇することも無く、食べると洸の方を少し笑ってみる。
「洸ちゃんもまだまだだね。」
「何で競ってるんだよ…」
そう言いながら、昼ごはんを食べる洸と早苗であった。

第二話　二人は

「出かけるか。」

洸は、そう言いながら昼ごはんの食器を片付けている。

早苗もその言葉に、ピクッと反応して言う。

「そうだね。洸ちゃん。」

早苗は少し笑ってそう言うと、服の準備をするのか、二階に上がって行った。

洸は、特に準備する物も無いので、暫く大人しく待っていた。

〜〜〜〜〜

「お待たせ〜！」

そう言いながら、早苗は階段を下っていく。

が、

急ぎすぎたのか、階段を踏み外してしまう。

「あっ」

そんな早苗の声と同時に早苗の体を背中で受け止める　洸。

「洸ちゃん・・・」

「ったく、お前は何回この階段を上ってるんだよ?」

洸はそう言いながら、早苗をおんぶして外に出ようとした。

しかし、玄関の扉まで来たところで早苗がそれを制す。

「ちょっ、ストップストップ！」

何だ？とも言いたげな顔で洸は早苗の方を見る。

「いつまで、おんぶしてるんですか!?」

「え？ずっとだけど。」

「下ろして洸ちゃん！」

早苗は少し顔を赤くしながらそう言うと、背中でジタバタ暴れる。

子供か・・・・・ と、思いながらゆっくりと早苗を下ろす洸。

「それじゃ行くか。」

洸はそう言って、早苗の手を引いた。

「うん。」と、早苗は言いながら洸の手を握るが、二人きりで出掛けるのは当たり前のことだったからだいぶ慣れていた。

暫く人気の少ない、畑の道を通る二人。

「ねぇ洸ちゃん。」

「んー何だ？」

「どこいくの？」

「さぁね」

「教えてよ！」

そう言いながらむすっとする早苗。

そんな早苗を見ながら、笑う洸。

暫くお互い喋らなかったが、洸が口を開く。

「なぁ早苗帰るの遅くなるけどいいか?」

「えっいいけど・・・」

「そっか。」と笑顔で微笑む洸を見て、少し心の中があったまる早苗。

更に歩いていると、二人が中学生の時一番行っていたゲームセンターが見えた。

「まずここだな。」

洸はそう言って、大きくもなく小さくも無い普通のゲームセンターに入っていった。

〜〜〜〜〜

「洸ちゃん、あれあれ!」

早苗は洸の服の裾をぐいぐい引っ張りながら、ある機械を指差す。
その機械はとあるリズムゲームで、最大２人まで出来るゲームだ。
流れてくる色の音符を足元の色に合わせる。と言うよくあるリズムゲーム。
中学生の時、二人はこれを一番やっていた。

「そうだな。アレやるか。」

洸は、少し乗り気でそれに賛同すると、早速２００円を入れた。

～～～～～

「あー楽しかった～」

早苗はそう言いながら、腕を伸ばす。

「と、言っても俺の２勝だけどな。」

「洸ちゃんに勝てるわけないじゃん！」

早苗はそうツッコミながら、とある方向を見る。

それに気づいた洸が、恐る恐る言う。

「早苗・・・ お前まさか・・・」

「そう、そのまさかです！」

早苗がそう言って指を指したのは、ホラーＦＰＳゲーム。

３ｄサングラスを掛けて、中に置いてある銃の形をしたモデルガンで画面のゾンビなどにポインターを合わせて打つゲームだ。

洸は、怖いのがまず苦手なので中学生の時は、出来るだけこれを避けていたが、今日は避けては通れない。

「分かったよ。」

洸は、半諦め状態でそう言うと、そのゲームが出来る仕切りを越えた。

「わっ！ちょっと待って、早苗俺の方めっちゃ来てるんだけど！」

「それは、洸ちゃんのプレイングスキルが無いからですよ！」

「プレイングスキル？ってヤバイ弾もなくなった！」

「ほら、そこの机に置いてありますよ！」

洸と、早苗はそうワーワー楽しく言い合いながらゲームをしていた。

洸も早苗も、お互い笑顔は絶えなかった。

〜〜〜〜〜

夕方６：００

日もすっかり暮れてきた頃、洸はある場所に向かおうとしていた。

「んーー次はどこ行くの？」

早苗は伸びをしながら、洸に聞く。

洸は少し悲しそうな顔をして言った。

「綺麗な場所。」

そんな洸の言葉に、早苗は考える仕草をとる。

「綺麗な……　場所？」

そんな事を呟いている間に『最後』の目的の場所に二人はつく。

「ほら、ここだよ。」

洸は笑顔でそう言い、この県内最大のタワーを指差す。

そこでは、今日限定のイルミネーションの祭りが行われており、タワーも良く光っていた。

「っわあ、綺麗。」

早苗は少し言葉に詰まりながら、そう言った。

別れの時間が近い…　そう感じているのか、早苗は口を自分から開こうとはしなかった。

「ほら、あそこ空いてるから座るぞ。」

洸が早苗の手を引っ張って、とあるベンチを指差した。

そこの見晴らしはとても良さそうで、何故誰も座っていないのか不思議なぐらいだった。

「そうだね、洸ちゃん。」

二人がそのベンチに座って、お互いに今日の事について、触れ合っていた時足元に置いてあった、小さい飾りまで光をだしタワー圏内が一気にライトアップされる。

「っ!?」

早苗は少し息を飲み、驚いたような表情を見せる。

そして、声を押し殺して泣いた。

そんな早苗を見て、洸は少しだけ焦るが自分も見ていると悲しくなってくるので、優

しく早苗を抱きしめる。

そして、言う。

「今日は、楽しかったな。『また』行こうな。」

そんな洸の言葉に早苗は何とか息を詰まらせながら言った。

「っ…　う…　ん。」

ライトは二人を照らした状態でずっとずっと光り続けていた。

第3話　おわかれ

「それじゃあ出て行くね。」

早苗は暗くなった部屋で、洸の顔をじっと見つめて言う。
既に時計の短針は、2を過ぎており深夜だった。
洸は目を閉じ寝息を立てて、静かに寝ている。

「じゃあね。」

湿っぽいのをできるだけ避けたかった彼女は、出来るだけ洸との思い出を思い出さずに音を立てずに部屋を出ると、階段を駆け下り玄関の前まで来る。

「お別れかぁ、ごめんね洸ちゃん……」

玄関の上のＬＥＤ照明の明かりを見ながら、彼女はボソッと呟いた。
やはり、最後の挨拶を言わずに行ってしまうのは気が引けたのだろう。
彼女は玄関の扉をグッと掴み扉を開ける。

が、

その手は、誰かの手によって阻まれてしまった。
そっと後ろを振り向くとそこには、寝ていたはずの洸が立っていた。

「えっ？洸ちゃん？」

少しだけ驚いた彼女は、玄関の扉をゆっくり閉めると、彼の方に顔を向ける。
湿っぽいのは嫌いなのに…　彼女はそう思いながら彼の顔をジッと見た。
暗闇のせいであまり見えないが。

暫くお互い何も喋らなかったが、洸が口を開いた。

「これ、買って来てたんだあげるよ。」

洸はそう言って赤色の花と、緑色のカエルの髪飾りが入った箱をあげる。

早苗はゆっくりと口を開く。

「彼岸花・・・・　と、髪飾り?」

早苗は暗闇の中まじまじとそれを眺めると、髪飾りを髪につけ花をそっと胸のポケットに刺した。

そして、洸の方を見て言う。

「あ、ありがとう。」

洸は軽く頷くと、早苗の背中を押す。
そして、
「行ってらっしゃい、『また』、会おうな。」
『また』そんな言葉に少しだけ目頭を熱くしてしまうが、早苗は振り向いて、出来るだけ笑顔で言った。
「うん、『また』ね。」
早苗は洸に気づかれないように声を押し殺して、涙を流し玄関の扉を開けた。
キキキ・・・ と少しだけ古い音がして、ゆっくりと扉が開く。
満月の光が少しだけ部屋の中に入り、早苗の頬を伝った涙が白く光る。
そんな涙を洸は気にせず、目をギュッと瞑り、早苗の少しだけおぼつかないような足

取りを押し背中を最後まで見届けた。

背中が見えなくなっても、日が開けて来ても早苗の行った方を見続けた。

そしてもう見えない早苗に対してゆっくりと洸は呟く。

「なぁ、早苗知ってるか？彼岸花の花言葉は、
『また会う日を楽しみに』なんだってよ。」

洸は目の淵に涙をためてそう言った。

登って来る朝日が彼を照らし、またその涙を照らした。

彼は様々な思い出を思い出し、外なのにも関わらずただ無数の涙の粒を流していた。

これが、彼の幻想郷入りするきっかけの前置きである。